

おしづの図書館

No.139

発行 青木和子
代表 松本和子
TEL 0473-311-0586
松本市校の原 104-416

講演会

図書館ってどんなところ!? Part2

7月26日(日)、市民会館101号室で建築家藤原孝一さんの講演会を開催しました。

藤原さんは松戸在住。1988年、都内に「藤原建築アトリエ」を設立。多くの大学や自治体の図書館設計に携わり、建築学会賞や図書館建築賞など数々の賞を受賞しました。滋賀県東近江市の湖東図書館や島根県斐川町立図書館などの素晴らしい図書館を設計された藤原さんのお話を伺う機会を得たことを、大変嬉しく思います。

講演会に参加された方々の感想および記録を掲載します。

藤原孝一さんのお話を聞いて

○国内外の様々な図書館の様子が分かり、大変勉強になりました。特に海外の図書館には、日本とは発想の違う素晴らしいものが多くある事に驚きました。より良い図書館が、日本でも多数できる事を願っています。

○とても分かりやすい説明でしたし、これまで知らなかった視点・知識が得られました。実に多様な形の図書館、また全開架に対する取り組みの差、

書架の奥行きといった細かな点にも目配りするチャンスとなりました。

○世界中には色々な図書館があるなあ、と思いました。同時に、多様なデザインがありすぎて、「本当に使いやすい、良い図書館とは何か?」という疑問もわいてきました。今後もっと深く勉強していきたい。

○各国によって図書館に対する市民の意識の違いのようなものが感じられ、驚いた次第。図書館に対する予算の優先順位が高くおけるのは、何故?

○居ながらにして、素晴らしい図書館を見ることができ、今日参加した意義がありました。松戸の図書館を図書館と云えるものなのか、考えさせられました。

。好奇心がわく、とても楽しい時間でした。短く感じました。

久しぶりに図書館学を勉強し直してみようと思います。

米国図書館が面白かったです。配架システムも初めて見ました。

海外との比較ができる、こうした講演は、面白い！

藤原さん、またお願いします。

。藤原さんの一言ひとことが、とても新鮮で刺激的でした。

特に、国レベルで図書館を充実させることが、高福祉や高学力につながるという指摘は、静かな革命だと思いました。

。本当に貴重なお話に、感激です。やっぱり図書館って、無限大の魅力を秘めていて、お話を伺いながらワクワクしました。自分が、ご紹介頂いた図書館を訪れているような、そんな気がいたしました。

素晴らしい図書館に出逢い、いし、身近にそんな図書館ができたうらやま強く思います。

湖東町と斐川町の図書館に行ってみよう。一日どっぷりと。お話を聞き画像を見ているだけで、心が洗われるような幸せな気持ちになりました。

。すばらしい写真、ありがとうございます。ございました。大変参考になりました。

今後、日本の図書館の貧弱な状況をもっと知る必要があります。

。お店があって、アーケード図書館、こういうの、いいなあと思えました。活字離れの日本人をどうやって図書館に來させるか、アウトレットがブームの今、何かヒント有りか、と思えました。絵本のコーナー等は、靴を脱いで、ジョイントマット等を敷

いたキッズコーナー風の所が有れば、と思えました。

。松戸に図書館を新築する時は、どんなイメージの建物になるのでしょうか。

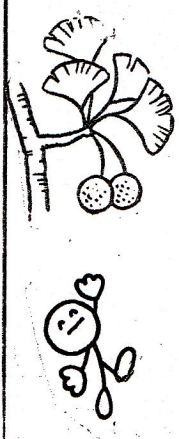
イメージとコンセプトを市民にアピールするためのデザインと建設費を、提案して頂ければ有難い。「おもしろい図書館」も、市民に夢を語る活動に変身したいものです。日本の政治の後進性を思い知らされました。

。北欧・カナダ・アメリカの図書館は、日本の図書館（千葉県・松戸市等）と比べて、利用者中心に活用できるように、閲覧室・読書室を作るように工夫している点は、大いに参考になった。

。老人用の交流室を作ったり、一般の読書室も個室的工夫もしている、うらやましい。

大英図書館で、孫文・南方熊楠・夏目漱石たち有名人が勉強したというが、これなら、朝から晩まで資料を探して勉強もできる。それだけのスペースなり本も、手近にある。書齋そのものにもできる。一般の利用者室の一隅を使うなどという幼稚なものではない。へ日本の場合、住宅事業があるのでは？

日本での図書館の民営化は、逆行だ。反対して然るべきものだ。



投稿

芸術品である図書館

小林孝信

7月26日、「おーい図書館」主催の講演会に参加した。これまでも参加したい魅力的企画が多かつ

だが、日程が合わず、久しぶりの聴講となった。

国内外を問わず、旅をする時は、地元や大学の図書館に顔を出す。だから今回、図書館の設計をされてきた建築家のお話は、是非とも聞きたかった。

講師の藤原孝一さんの講演は、期待に違わぬものだった。ご自身の設計されてきた図書館以外にも、欧米のいろいろなタイプの図書館の紹介も、とても興味深いものだった。

藤原さんは、20年ほど建築事務所勤務された後、1988年に独立された。事務所勤務時代は主に大学の、独立後は自治体の図書館を中心に設計・建築されてきた。

講演で紹介された作品のなかで特に印象深いのは、滋賀県湖東町（1993年）と島根県斐川町（2003年）の図書館である。いずれ

も図書館建築優秀賞や県の景観賞を授与され、社会的に高く評価されている。

西図書館に共通するのは、平屋で和風の外観（切り妻風の屋根）を持ち、天井を高くし、のびやかな空間が確保されていること。後者は、建築の中に高い樹木を入れ込むなど、自然との一体化も計られており、今すぐにも見学に行き、また、そこで書物との対話に浸りたい気分誘われる。

外国の図書館も多数ご紹介され、その一つ一つが魅力的な形を表現し、ノウハウを内蔵している。建家の一部を半地下式にしたオランダのデルフト市の図書館のユニークさ。バンクシーバー市やシアトル市の抽象画を建築にしたような鮮やかな図書館。一方で、アメリカのオーランド市のまるで個人の書齋のような内装など、それぞれの主張とアイデアに目を見張る。

図書の開示方法についても、漸新な試みがされている。バンクバーでは10万冊、シアトルでは20万冊と、所蔵する図書が開架されている。また、ニューヨーク市のコロナ分館では、書架の幅を30cmにして、A4版の本も横置きができるへ日本では15cmが一般的)などの工夫がされている。

図書館におけるハードとソフトの微妙なバランスなど、新発見の多い講演であった。

当日は30人ほどの参加者に会場は埋まったが、若い人が少なかつた。こういう図書館世界を目にすれば、若い人ももっと本と図書館に回帰してくるように思われた。

青木和子

盛り沢山の内容で、2時間はあっという間に過ぎました。

大学図書館に続き、自治体、海外の図書館が紹介されました。

図書館は、情報サービスにけではなく「人との出会いの場」でもある。斐川町立図書館では、絵本・児童と一般閲覧室の間にベンジャミンの太木のある新聞雑誌コーナーを作った。エアコン調節で、夏の落葉は無い。

斐川町で特筆すべきことは、町長と図書館準備室長(開館後、図書館長に就任)が設計者選定委員会に入ったこと。図書館ができた時に責任をとる人が、委員会に入るべきだ。

設計建築を引き受ける側としては、行政の単年度予算決算は非常に悪い方法だと思う。予算成立後、実際に取り組める期間が短すぎる。

図書館は時代に合わせて変わっていくべきで、カウンターや書架も、使い回しができ分解組立て可能なものを使いたい。北欧(フィンランド・デンマ

ーク・スウェーデン・ノルウェー)イギリスとアメリカ・カナダとの違いを感じました。

全体的にヨーロッパは、新しいものでも落ち着いたオーソドックスな「図書館」という印象。北米の新しい図書館は、建物自体が美術作品のようで、照明や設備に工夫を凝らしてありますが、使い勝手はどうなのか?電力がかり過ぎるのでは?と思いました。

最後に藤原さんは、「四大文明など文明の栄える裏には必ず図書館があった(エジプトのアレクサンドリヤ図書館など)。日本は、江戸時代には「落校」があったが、その後「図書館」的なのが無いまま、必要性を知らなかった。

図書館は国の底力になる(例)フィンランド)。松戸にも、市民に頼られる図書館をつくりたいですね!と締めくくりました。